瀬田の丘 裏庭版

主任司祭から瀬田の兄弟姉妹へ

主任司祭 小西広志 神父

創刊 2022 年
編集協力・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部　東京都世田谷区瀬田 4-16-1

マリア祭

二〇二〇年から猛威を振るってきた新型コロナウイルス（COVID-19）感染症は、だいぶ落ち着いてきたようです。社会にも、教会にも、日常が戻ってきました。多くの小教区共同体では、今までできなかったことをもう一度やってみようという気運が高まっているようです。

確かに、それは尊い取り組みなのですが、もしかしたら社会も教会も、コロナ禍の前にはもう戻れないのではないかと思うのです。

ところで、今から十二年前の東日本大震災の時に、仙台教区の司教さまだった平賀司教さまは、「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」（2コリ5章17節）というみ言葉に支えられて復興の基本計画を策定しました。

地震と津波で徹底的に壊されてしまった、そして、原発事故のおかげで不安な日々を送っていた仙台教区の人々に向けて、さらには日本中の信者に向けて、司教さまは「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」と呼びかけたのです。

あの時、もとの生活に戻れないような状況の中で、なぜ司教さまは聖書のこの箇所を選んだのでしょうか。パウロのこの言葉から、司教さまはどんな力と導きを得たのでしょうか。

今、新しい出発が必要です。東日本大震災とコロナ禍を一緒にしてはならないでしょうけれど、この三年でわたしたちの生活は一変したのです。瀬田教会も新しく出発しなければなりません。過去にこだわっていたらいけないのです。

コロナ禍の期間、聖堂を閉めたことは何度かありましたが、ミサの入場制限はしませんでした。そのせいかどうかは知りませんが、信徒の数は増えました。新しいメンバーがわたしたちの小教区共同体に加わりました。小さな子どもも増えました。このことは大きなお恵みです。

しかし、教会での交わりが制限されていましたので、新しい方と知り合うチャンスが少なかったです。これからは日曜日のコーヒー・サービスなどを活用して知りあい、交わる時を増やしていきましょう。

また、当然なことですけど、わたしたちは歳を取ったのです。二〇二〇年から三才歳を取ったのです。もう力仕事などは難しいです。ですから、教会のバザーは中止しましょう。もう、かつてのよ

うな大がかりなイベントはできないのです。

その代わりに毎年、五月の末の頃には「マリア祭」と称して、野外ミサをグランドのルルドの前でしましょう。そしてミサが終わったら、ピクニック気分でお弁当を囲みましょう。

小さな取り組みかもしれませんが、バザーより人と人の交わりは生まれるような気がしております。皆さんのご理解とご協力をお願いします。

今年の「マリア祭」は五月二十一日です。ミサは十時半から始まります。

当日は八時半と九時半のミサはありません。ご注意ください。

神学的随想　雑談から生まれるシノドス的教会

二〇二一年から教区のシノドス担当者を任じられて、やっと道半ばである。いろいろなことがあって、いろいろ考え、いろいろ話し合い、クマちゃんと動画を撮って過ごしてきた。最近、気がついたことがあったのでSNSに投降した。

「シノドスって、つまるところ教会で雑談しなさいという招きじゃねーのか？　いろんな人と雑談を重ねなさい。そしたらなんか見えてくるんじゃね？　みたいな。しかし、雑談はしないよなぁ。バカ話みたいなのはしないよなー。でもね、言わせてもらうと、雑談始めると、とめどなく長々話す爺さんがいるのも確かなんだよ。これは演説であって雑談じゃないよねー。」

教会も社会のご時世に流されて、能率と効果を求める「集い」となった。最小限の手間で最大限の効果を求めるこの世にあって、教会も同じように動く。小教区共同体の話し合いも、結論を探すことを求める。役割分担が大切で、なんとか係というのが小教区共同体の中にあふれている。

普段から交流を深めていないのに、月に一度だけ集まって効率よく結論に至るはずもなく、しかも実質の交流がないのに係ばかりつくったら官僚化が進むだけだ。そこに退職したオヤジたちが自分の居場所を見つけて共同体にうごめく。彼らは社会の価値観と自分の手柄話を共同体のなかに響かせようとしている。だから、信仰の共同体とは名ばかりなのだ。

教会の醍醐味とは、いろいろな人と出会い、交流を深め、一緒に神を賛美できることだ。教会でなければ出会えない出会いがある。教会ならではの交流がある。教会だからこそできる賛美がある。そんな教会のすばらしさを歪めているのは他ならない、信者（信者だから聖職者も含む）だ。もっと、お茶でも飲みながらの雑談を楽しんだらよいのではないか。

ところで、この交流なき信仰のあり方はもしかしたら日本の教会特有の事象じゃないのかと誇大妄想するようになった。そんな大それた考えをするようになったのは、「遠藤周作と奥村一郎と井上洋治は一九五〇年代半ばにフランスにいたが、同じようにフランスにいた森有正とは交流があったのだろうか。」という問題提起をSNS上で見たからである。遠藤と井上は交流があった。二年遅れて渡仏した奥村と遠藤の間には交友はなかったようだ。当時パリにいた森有正とは交流がなかっただろう。

いやそもそも、奥村師も井上師もどちらも交流を好まない人物ではなかろうか。自分で、もっと言えば自分の力だけでキリスト教を突き止めようと四苦八苦した人々だったように思える。成人洗礼の二人は、なんだか得体の知れない日本というものを背負って渡仏した。それで、日本的な心情にそぐわない当時の神学に真っ向から反発した。反抗期の中学生が何を見ても何を聞いても反発するのに似ている。この二人はキリスト教の叡智を学ぼうとはしなかった。修道院に入れば信仰の何かが得られるのだと思ったのだろう。しかし、知恵との対話はなかった。自分の信仰を確立するのがやっとで、他者との交わりは二の次、三の次だったろう。と、書いたら全国に散らばる両師のファンから怒りを買うだろうか。しかし、何も学べなかった二人は「日本的」という言葉を頼りに、人生の早い時期に自らの存在を神話化してしまったように思う。

遠藤は少し違っていた。彼は交流の人だ。人との交わりを大切にする。そして、他者の中にある悪を見抜くことで、自分の中にある悪に気づいていく人だ。

わたしは、この半世紀、日本のカトリック教会で名を馳せた神学者や司祭たちは、交流ができない人たちだったのではなかろうか、と考えている。つまり、無駄話ができない人たちだったように思う。

異なる人との交流は対話から成り立つ。対話は相手の言葉に耳を傾けることから始まる。実はカトリック教会は異なる文化の人々との対話へと開かれている教会だ。そのような「出会い」と「交わり」のダイナミズムを享受したのは外国人宣教師たちだったように思う。一九六〇年代のスクート会（淳心会）のベルギーからの宣教師たちの活動は、その事実を知らせてくれる。日本人の司祭たちはどうだったのだろう。第二バチカン公会議後、解き放たれたように社会に進出した彼らは、様々な関わりを生もうと努力する。井上師は多摩の新興住宅地に宣教の拠点を作り、その後は都会の真ん中に庵を結んだ。そこには多くの若者たちが集った。奥村師は京都でミッションスクールの校長となり、晩年は薬物依存症の方々との交わりを生きた。

しかし、二人の関わりにはどこか上から目線が見え隠れする。深い交流からはほど遠いように思える。粕谷師も同じだ。確かに青年海外協力隊で働いていたが、神学生時代にハンセン病施設の訪問で感じた憐憫の情のようなものを抱えたまま交わりを生きているように見える。こんな考えをするわたしは少しこころがひねくれているのかもしれない。どうやら、自他共に評価された先輩司祭たちは、確かに優れていたが、まったく異種の人との交流を生きるのが下手ではなかったのかと思う。そして、狭い共同体（コミュニティ）を作りあげてしまった。

ところで『フッサールの遺稿』という本を読んだ。副題に『ナチから現象学を守った神父』とある。フランシスコ会のファン・ブレダ神父についてのノンフィクションである。この神父は決して「まとも」な哲学者ではない。しかし、人と人の交流を作ろうと尽くした。人と人とをつなげるのが彼の使命だった。誰とも分け隔てなく交流している。同じフランシスコ会としてなんとも誇らしい気になる。本には、哲学者たちと雑談を楽しんでいる神父の姿が載っていた。

そんな雑談と交流についてあれこれ考えを巡らせていたら、一つの着想が浮かんできた。東京のフランシスコ会の神学院で教義神学を教えていたマウルス・ハインリッヒ神父とイエズス会のテイヤール・ド・シャルダン神父とは交流があったのではないかという問題提起だ。終戦近くの北京で交流があったかもしれない。こう考えると、来日後、マウルス師が教皇庁から批判されているにもかかわらずテイヤール・ド・シャルダンの著作を隠れて読んでいたことはうなずける。そして、その美しい宇宙論を神学生たちに紹介していた。もしかしたら、マウルス師はスクート会の宣教師たちと交流していたかもしれない。テイヤール・ド・シャルダンを熱心に日本に紹介したのは彼らだった。

こんな感じであれこれ妄想を巡らせてみると、おもしろい。歴史に疎いわたしだが、ささやかな歴史ロマンである。マウルス師の件を、以前、福田勤師に聞いたことがある。彼はじっと考えながら、軟禁状態にあった二人の神学者が北京で交流したことはあったかもしれないと答えてくれた。その福田師もまた広い交流の関係をお持ちだった。先日帰天された永井路子氏と夫の黒板伸夫氏との長く続く交流は、彼らに新しい世界を開かせ、安らぎのこころを与えることになった。

口角泡を飛ばすような議論も大切だろう。高名な聖職者の話に頭を垂れるのも大切だろう。しかし、信仰の共同体にとって大切なのは、まったく縁もゆかりもなかった人と出会い、交流を重ねることではなかろうか。その交流とは雑談で十分なのだ。しかし、大切なのは「聞く」こころかもしれない。

ちなみに、わたしの住む瀬田修道院には在宅の医療、福祉の関係者が訪問してくださる。皆さん、雑談を楽しんでいる。高齢の兄弟もそれを喜び、訪問する方々も何かしらのいのちをいただいて帰って行かれる。

絵画に寄せて

イエス・キリストの昇天

ガロファーロは一六世紀中頃に活躍した画家ですが、同時代のラファエロから影響を受けています。

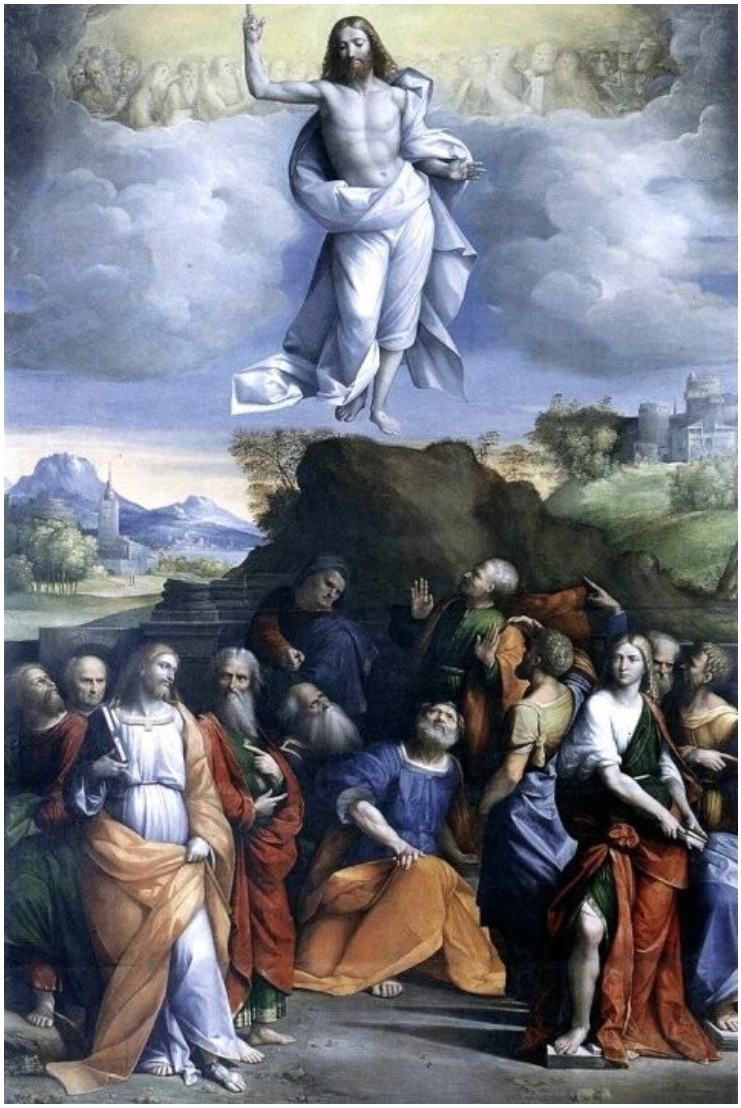
ここに紹介する「キリストの昇天」は、ラファエロの傑作「キリストの変容」と同じ頃に描かれました。構成も類似しています。

画面上方の三分の一を占めるご昇天のキリストは、視線を地上に向けています。下方には十二名の群像が描かれています。弟子たちを表すのでしょう。

中央部に位置して、下からキリストを眺めているのはペトロでしょう。その左にいて本を手に持っているのは福音記者マタイでしょうか。それと相対峙するかのように右側で本に指を挟んでいるのは福音記者ヨハネでしょう。

ペトロ、マタイが黄色味がかった衣をまとっているのは、彼らがイエスの十字架から逃げたという裏切りの意味なのでしょう。それに対してヨハネがまとう緋色の衣服は、燃えるような神の霊の息吹を表すのでしょう。ヨハネが自分のもっている本に指を挟んでいるのは、福音書を記すだけで救いが完了するのではなく、読みかけの本のように救いは実現しつつあることを表しているのかもしれません。

画面の中央部は、手前に岩山のようなものを配置し、左右に遠景



『キリストの昇天』ガロファーロ　1510-20 年
油彩・パネル 314 x 204.5 cm　バルベリーニ美術館 ローマ

『キリストの変容』
ラファエロ・サンティ　1516–20
ヴァチカン美術館

として町の様子が配置されています。こうして画面に奥行きが生まれています。その一方で左右の雲の上の方には表情がはっきりとしない一群の人々がシルエットのように浮かび上がっています。イエス以前に世を去って地中に閉じこめられていた死者たちが、復活のイエスによって天に引き上げられていたことを表すのだと思います。奥行きのない描写は、天国には時間も空間もないことを表そうとしているのでしょう。

この絵画を鑑賞する人は、最初にご昇天のキリストに視線を向けるでしょう。そして、キリストが地上に投げかける視線と同じように、画面の下の方にいる人々を眺めるでしょう。そして、もう一度、遠くの町の様子を味わいながら、キリストが昇っていく先を見つめるのです。視線を上に下に動かすことで、ご昇天のキリストを中心とした新しい世界に触れることができます。

主任司祭からのお知らせ

感染症対策について

新型コロナウイルス感染症対策が緩和されています。しかし、聖堂内では十分に気をつけてください。

また、マスクの着用は個人に任せられます。

マスクをしていない人を裁かないでください。マスクをしている人に対して悪い視線を送らないでください。

典礼の暦

5月7日　復活節第五主日

14日　復活節第六主日

21日　主の昇天　マリア祭

ミサは10時半より。

8時半と9時半のミサはありません。

お弁当の販売などがありますから、ピクニック気分で楽しみましょう。

28日　聖霊降臨の主日

6月4日　三位一体の主日